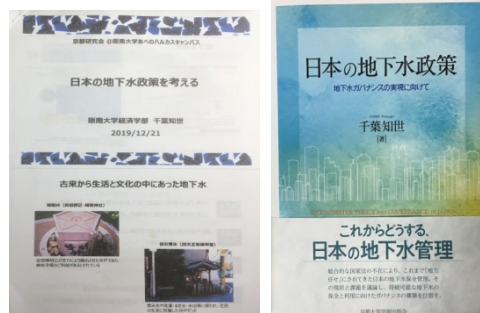


## 「日本の地下水政策を考える」

阪南大学あべのハルカスキャンパスで開催された研究会に参加した。写真は報告者の千葉知世さんのレジュメ表紙、10日にレポートで紹介した千葉さん著『日本の地下水政策』。研究会では、この著書の核心をビジュアルに分かりやすく報告され、宮本憲一先生から感想と研究の課題が提起された。水政策については、治水・利水・保水・遊水という4側面を総合化して考えることが大切であり、農業や災害との関係が問題になると。



私もレポートに書いた点などをコメントした。千葉さんの報告と質疑により、疑問に感じていた点も理解ができた。報告レジュメの「まとめ」を紹介しておきたい。

「私水」論を背景に国家は地下水の規制に長らく消極的であった。そうした中で地方自治体が条例を制定し、地下水を公共性の高いものとみなして採取規制を行うなどして、地下水保全に取り組んできた。その結果、問題は一定程度鎮静化した。

だが、近年は地下水の用途が多面化し、地下水に関わる問題も多様化している。その中には気候変動による地下水・地下環境への影響など科学的不確実性の高い問題、「水余り」など従来とは逆の構造の問題、リニア建設などかつてない規模の地下開発などが含まれている。また、地方自治体の財政難・人手不足を背景に、主体の協働による地下水保全管理の仕組みに注目が集まっている。以上のことから、地下水の総合的な保全管理の在り方と、その合意形成にかかわるガバナンスの研究が重要性を増している。

写真下は、会場のあべのハルカス 32 階ロビーからの天王寺公園界わい。研究会の始まる前に、景色を眺めながら撮った。大阪市立美術館や動物園が見えるが、注目したのは「てんしば」と呼ばれる写真手前のゾーンである。

天王寺動物園の帰りに、「てんしば」を通ったが、緑が少なく、公園らしさを感じなかった。朝日新聞 10 日夕刊に「民間力にぎわう公園」という大きな見出しの記事が掲載されていた。



公園を運営する事業者として近鉄不動産を選び、15年に一部エリアを約13億円かけてリニューアルした。コンクリートや噴水だった場所は「てんしば」という名称の芝生広場になり、カフェやゲストハウスなど12の商業施設もできた。

(2019年12月23日)